

かれら 下

ジョイス・キャロル・オーツ

大橋吉之輔 真野明裕訳



かれら 下

ジョイス・キャロル・オーツ 大橋吉之輔 真野明裕訳



● 海外純文学シリーズ・8



かれら 下巻

ジョイス・キャロル・オーツ著／大橋吉之輔・真野明裕訳

昭和48年7月15日 初版発行

発行者／角川源義

印刷者／中村武

製本者／宮田四郎



発行所／株式会社角川書店 東京千代田区富士見2-13 ⑩102
⑩東京195208 電話(265)7111<大代表>
落丁・乱丁本はおとりかえします

Printed in Japan

信教印刷・宮田製本

0397-792008-0946(0)

か
れ
ら

下
卷

THEM
by
Joyce Carol Oates

Copyright © 1969 by Joyce Carol Oates
Japanese translation rights arranged with
Blanche C. Gregory, Inc. through Japan
UNI Agency, Inc.

第二部

いずこの国に來たりしか
(承前)

4

一九五六年九月。ジュールズは花を満載したトラックを運転して、花とは無縁なデトロイトの通りを走り回っていた。彼はすっかり車の運転に馴れてしまつて、エンジンの单调な音が思考や体の働きとごっちゃになつて区別がつかなくなつていた。甘い花の香りにぼうつとしながら、思いめぐらすべき材料も手がかりもないのにバーナードの姪のことを考えた。

彼はトラックを運転してグロス・ポイントのほうまで出てゆく折があると、彼女の家の近くをいたりきたりしながら、自分の姿は人には見えないのだという氣になつて人目につくことを恐れなかった。彼の髪は配達係の制帽の下でべったり撫でつけられていた。バーナードのことについては、あの時の光景にいささかおぼえていたので、あまり考えなかった。おびただしい血、眼球にべったりとなすりつけられた血……。だが、バーナードの姪のことは四六時中頭にあった。彼女はあの死者の光景とはかけ離れた存在で、絶えず急いではいるもののべつにこれといった行く先のない彼の求めに応じたトラックの動きにつれて、茎や葉や頭をリズムカルにうなずかせながらあちらこちらと運ばれてゆく香ぐわしい花の積荷となんとなくつながりがあった。はつきりとした手がかりは何ひとつなかった。あの少女のことを考える時、彼はフェイの肉体の冷やかで尊大でほればれするようなよそよしさや——フェイは今では姿を消してしまつていたが——ジュールズにとっては不可解なバーナード

の冒険の虚しさなどを、心の中で彼女のことといっしょくたにしてしまふのだった。

彼は何ごとによらず緻密に考えることを避けるようにしていた。運転をつづけるためには自分にかじりついていたほうがいいのだ。バーナードの姪についての物思いはべつとして、何も考えずに眠れるように夜は疲れていることを望んだ。もっともバーナードの姪についての物思いも、ほんとうは物思いと言えぬほどのものではなかった。そんなふうだったにもかかわらず、やはりバーナードがあれほど急に死んで二度と戻らなかったことに彼はとまどってしまっていた。たった今跳ねるようにして車に駆け寄ってきたばかりの彼が、一分後には仰向けに横たわっていて、しかもそれっきりだったのだ。

あわてて動き回る警察の連中がいかに指紋を台無しにして証拠を見失ってしまうかを知っているジュールズにとって、自分がいっこうに逮捕されないことは意外でもなんでもなかったが、いつまでたっても事の次第が明らかにならないのにはびっくりした——何週もの間、彼はバーナードの死を知らせる記事をさがして新聞を隈なく調べたが、そのことにふれた記事は一行も載っていなかった。とすると一人の人間が死んでそのまま闇から闇へ消えてしまうということもありうるのだろうか？ 先月ロレッタの友だちの家の窓に撃ちこまれたライフルの一弾にそれは似ていた。一発の銃声が鳴り響き、弾丸が窓ガラスを破って飛んできて壁にめりこんだのだが、それ以上何事もなかった——多少の悲鳴や驚愕はあったもののそれっきりだった。ライフルが発砲されることはあっても、それはめったにあることではない。その結果何かが起こるということもない。

彼はたとえ回り道になる場合でもグロス・ポイントに引き寄せられた。その分の遅れはいつもの道走る時にスピードを上げて取り戻すのだった。グロス・ポイントは、彼にとって常緑樹と煉瓦で作られた楽園だった。そこには窓を狙撃するような人間は一人もないし、ドアには鍵がかかっている

かった。デトロイト・マフィアの幹部たちが上流社会の暮らしを求めて邸宅を買い、髪カミの縮れた子どもたちのために乳母を雇っていた。みんなそこに腰を落ち着けて住みつき、湖から吹き寄せる空気を存分に吸っていた。ジュールズは自分の雇い主がその住人たちの間にもっと商売を広げることを願った。彼はグロス・ポイントにある家庭へ花を届けるのが何にもまして好きだった。菊を入れた金箔張りの重いバケツを車から降ろし、軽い花を入れるには重く高価なその容器を手にとって金色の呼び鈴を鳴らし、家の奥で金のチャイムが響くのに耳を傾けるのがたまらなく好きなのだった。彼の見る夢の中では、フェイの肉体がグロス・ポイントの美しく凝った邸宅の巨大なたたずまいとごっちゃになり、次いでその大邸宅がフェイとは違って無垢な、そういう住居に住む資格のあるバーナードの姪の肉体、というより存在、と一つになって区別がつかなくなるのだった。フェイがそんな家に住むことはけっしてないだろう。うとうとしながら彼はそんな家の神秘的な金色に輝く内部を夢想し、部屋や廊下や、彼にとつては謎である女の秘めやかな香ぐわしい肉体にも似たそのなめらかさなどを感じた。彼はまだ十八だった。

その仕事はくだらないものだったし、彼もそれは承知していた。そのくせその仕事をやめて別のを見つけるのは気が進まなかった。彼は心地よい惰性に閉じこもり、まるで長距離電話で催眠術にでもかけられたように恋をしていた。彼は市内を一巡してグロス・ポイントに至る自分の配達区域を、自分を容赦なくあの少女のもとへ導いてゆく縦横に交差する巧妙な蜘蛛クモの巣だと思っていた。彼女のほうは彼に会っても誰だかわからなかっただろう。彼のことをおぼえているはずはなかった。ところが彼はいつ彼女に出会ってもいいように運転席で身構え、恋の計画に表情をやわらげ、緑色の帽子の下で抜け目なく目を配っていた。その帽子はやむなくかぶっているのか、それともどうでもいいと思つてのことなのか、どっちともつかなかった。

「その制服を着てるおまえをあたしは好かないね。あたしは制服ってやつは嫌いなんだよ」ロレッタは酔っ払うと警官の制服が頭に浮かぶらしくてよくそう言った。「せめてそのいやらしい帽子を取っとくれ！」

「氣取ってるわけじゃないんでして。花を運ぶトラックを運転できてうれしいんです」とジュールズは誇張したうやうやしさで言うのだった。

「家の中ではそんないやらしい帽子はお取りつたらさ！」

するとジュールズはおじぎをし、母親をいやがうえにもいらさせる騎士もどきのしぐさでさつと帽子を取るのだった。「おまえつたら、どうかしてるよ！」と彼女は言うのだった。

デトロイトにはそんな氣配はまったくなかったが、グロス・ポイントの秋は美しかった。紅葉しかけた木の葉や玄関への小径の周囲に左右対称の模様を描くように配列された秋の花々、そして休暇が終わって学校に戻ったばかりの十代の娘たちなどが彼の目をひいた。少女たちはブリーツ・スカートや黒っぽい生地のパーミューダ・ショーツをはいていて、人によってはほっそりとした強靱な脚を膝までの靴下で包んでいた。一人の少女への彼の欲望は、その少女たちすべてのために惜しみなく開花した。バーナードの姪に恋をしていたのだとすれば、彼はグロス・ポイントの住人たちの姪や娘である、その色白の肌と艶々した清潔な髪を持った思慮深い少女たちみんなを恋していたことになるのだ。彼は十四のころのほうが十八の今よりもおとなだった。恋をして傷つきやすくなった十八の彼は、新しい仕事口や金や妹のことを考えようとすれば無理に心を励まさなければならなかった。いくら金を積んだところで自分のものにするのできないバーナードの姪が、彼の心を金にまつわる考えごとから解放した。金で彼女を手に入れられる見こみはまったくなかった。しばらく前なら百ドルでフェイだったら買えたかもしれないが、今ではフェイの値段さえもっと高くなっているし、それにどっ

ちみちフェイは姿を消してしまっている——それなのにどうして新しい仕事など必要だろう、自分は現在に生きているのではないか？ 他にどんな重要なことがあるというのだ？ 現在に生きている自分が、自分自身にモーリーンのことを考えるように仕向けることなどどうして耐えられようか？

彼は半端ものの花を妹に持って行ってやったが、彼女は汚れた寝巻を着て家の中でごろごろし、花などろくに見もしなかった。彼がアパートに寄りつかなかったのは、妹やロレッタやあのファéronグの血を引いたチビがぎゃあぎゃあ泣く声を避けるためだった。もし例の少女のことから立ち直ってもう一度昔の自分に、うまいことがないかと目を光らせている抜け目のないジュールズに戻れるものなら、彼はいくばくかの金をつかんでモーリーンを確かな医者^みに診せ^みもし、家族みんなからすっかり自由になりもしただろう。だが、彼は盗みを働いてつかまることをとりわけ今は恐れていた。今や何が起るかわからないのだ。自分の自由をいちかばちか賭けてみるというわけにはいかないのだ。彼はモーリーンのことに頭を使うのをやめて、バーナードの姪のことを考えるようになっていた。彼女のことは片時も彼の心から離れなかった。恋を歌う流行歌の熱っぽささながらに彼の腕に飛びこんできて、そこに安らぎをうる娘たちは他にもいるというのに、ほんの束の間会っただけの少女の思い出にふけているなんて自分は気でも狂いかけているんだろうか、と彼は思い、そしてあの少女が自分の腕の中で安らぎを見出すようなことは絶対にないだろうという予感をいだきもするのだった。

そのくせ彼は他の娘たちを相手にして彼女に備えるのだった。つまり彼女の恋人としてのジュールズ・ウェンダルをリハールしているわけだった。自分を批判的に観察することもあれば、自分にほれぼれすることもあった。おれは殴り倒され小突きまわされても参らなかつたジュールズ・ウェンダルじゃないか？ これまでつねに危機を脱してきたおれじゃないか？ どん底に落ちたつてけつして運に見放されず、必ずてっぺんまではね上がってきたじゃないか、まるで何ものをもつてしても息の

根を止めることのできない、不死身の泡でできた全体が単一組織の幸運なゴムまりのように？

彼はなんとしてもモーリーンのことは考えまいとした、自分の暗いほうの分身、黙って寝転がり垢だらけの体をして魅力もなければ品もないあの妹のことなどは——彼は十八になっていたし恋をしてもいたので、しいて妹のことを考える気にはなれなかったし、またそんなことをするような馬鹿な真似はしもしなかった。彼は意識がとろけるような空想の恋に心を乱して、好奇心に満ちた眼差しで相手をまともに見つめる長い黒い髪の少女に思いを凝らすのだった。その少女は変死した叔父によって彼に結びついてはいたものの、彼は彼女のことをまったく知らないし、彼女にしても、いつ何時腕をのばして彼を引きずりおろすかわからない彼の生活につながる二人の女のことも何も全然知らないわけだった。そうやって一人の少女に心を奪われていながら、なおかつ彼は自由だった。前途は洋々としていた。もっとも時には、トラックに積んだ花の浮わついた匂いにまじって何かもつと強烈で永続性のあるものがかすかにプンと臭うことがあり、それは市バスや大型の貨物自動車から彼の顔にまともに浴びせかける悪臭であり、つまりは彼が生涯脱け出せそうもない世界からの、忌むく陰險なひやかしを含んだむかつくような腐敗臭であり、挫折の悪臭なのだった。

ある晩、彼がしぶしぶながらも我を折って、ロレッタのアパートへ様子を見に寄ってみると、その台所に男が一人すわっていた。

チェッ、赤ン坊ガマタ一人フエルツテワケダ、とジュールズは思った。

ロレッタがパツと立ち上がった。「ジュールズ、誰だと思う！　ここにいる人、誰だと思う！」ひげを剃ったばかりらしく顎のあたりに二つ三つ固まりかけた小さな血の塊まりがまだなまなましいその男は、ジュールズと握手をしようとして立ち上がった。

ロレッタが叫んだ、「ジュールズ、この人はブロック伯父さんだよ！　おまえの伯父さんさ！　あ

たしの兄さん！ それから、ブロック、これは息子のジュールズ、長男よ。この子どう思う？ 男前でしょ？」

二人は力強く握手をかわした。

「どうぞ……どうぞよろしく」ジュールズがどもりながら言った。

「よろしく。それはなんの制服？」とブロックがきいた。

「ジュールズは花の配達をやってるの。トラックでね」

「そいつはいいね」

「とっても安定した仕事なのよ。ジュールズは一生懸命働いてるわ」

ブロックは何を言っているかわからなくて微笑を浮かべた。ひどくそわそわしている。

ジュールズはブロックの上背と広い肩に威圧感をおぼえた。どう考えたらいいのか決めかねていた——こいつは何がほしいんだろう、いったい何が起こってるんだ？ それともこのことは、おふくろの兄貴が現われたってことは、喜ぶべきことなのか？

「ブロックがどうやってあたしたちを見つけたかっていうと、それがじつにけっさくな話なのよ！ まったくねえ！」とロレッタが叫んだ。

ジュールズは少々アルコールのまわった彼女の興奮ぶりに辟易し、なんとかその背後にあるものをつきとめようとした——おふくろは本気なのか、それともそう見せかけてるんだろうか？ 見たところ彼女は本気らしかった。おふくろはひどく取り乱してうれしがっているし、それにおれとしては第二のファールングがおふくろのところに転がりこんでガキをもう一人はらませにきたのでなかったことをなにもともあれありがたいと思わなくちゃならないな、とジュールズは思った。ちょうどこの時、子どもがテーブルのそばでふざけていて、今にも罐入りのビールをひっくり返しそうになっていた。

ジュールズはそれを無感動にじっと見ていた。

「おすわりよ、二人とも！ ジュールズ、ビールをお飲み。ほんとにねえ、びっくりしちゃった！ 一時間ほど前ブロックがね、戸を叩いたの、この人ったらまるっきりなんでもないことみたいにした段階を上がってくるんだもんね！ あたしは顔を見てすぐわかったわ、お互いに長いこと会ってなかったのにさ——何年ぶりだったかしら——十九年だわ。へえー、驚いた、十九年とはね！ まったくあきれかえっちゃうじゃない、人生なんて？」ロレッタが笑いながら言った。彼女はジュールズを引っ張って椅子にすわらせた。ブロックもぎこちなく腰をおろした。

ジュールズは用心深い微笑を浮かべながら彼を見守っていた。彼はその男を信用していなかった。この兄なる人物は謎に包まれていた。以前からロレッタは折にふれて、自分にはあることをしでかして町から逃げ出さなくちゃならない破目になった兄がいて、町の名なんかどうでもいいんだけど、とにかくその兄とはそれっきり一度も会ってないんだということをそれとなくほめかしていた。その話をする時彼女は終始生き生きとした恨みがましい興奮を示すのだった。ブロックが誰かを殺したことはまず間違いないかった。見るからに人殺しぐらいやりかねない感じだった。ズボンぐいと引っ張り上げてライフルを取り、行き当たりばったりどこかの家の窓に弾丸を撃ちこんでそのままぶらぶらと路地を歩いていってしまふ男、といった感じだった。馬鹿面（ばかづら）というのではないがどちらかといえば鈍そうな感じで、冷酷で気難しいあばた面をしていた。ジュールズはその目が自分の目と非常によく似ているのに気づいた。その脂ぎった大男の顔をのぞきこんでいる自分は自分自身の目ののぞきこんでいることになるのだ、と思った。彼は馬鹿みみたいにニヤッと笑った。

ファアロングの子どもランドルフがビールの罐をひっくり返し、シャツの胸にビールがはねかかった。

「バカ、気をつけなきゃだめじゃないの！ この子は始終何かしらひっくり返すし、ヘマばかりやってんだから！」とロレッタが叫んだ。いきなりランドルフをつかまえてピシャッとぶった。

ブロックは素知らぬ顔をしていた。太い腕をテーブルにもたせかけ、まるでジュールズの意見がものを言うとも思っているみたいに、ジュールズにほほえみかけようとした。ジュールズはランドルフへの騒々しい罵声や思いがけない伯父の出現に心をかき乱されてうつろな目をしながら、自分はどうしたらいいんだろうかと思ひ迷っていた。むりやりバーナードの姪のことを考えようとした——彼女はいわば想念のオアシスなのだった。彼はどうしても彼女のことに心を向けようとした。男が、女の腕に抱かれてすべてを投げ出し息をつまらせながら暖かい羽毛のような破滅にとびこんでゆくように、女にまつわる想念に落ちこむことができるなんて、いったい女には何があるというのだろうか？ 彼は空想の中で月ほども遠いどこかの国、たぶん朝鮮にでもいる一人の兵士になり、男の戦いの汚辱の中から立ち戻って女の腕に飛びこみ、指で女の髪やすんなりのびた滑らかな背を撫でる……その指は人殺しにせつせと精を出した指だが、そうやって愛撫するのにも適しているのだ……。彼の指は苛立たしげにテーブルをコツコツ叩いていた。またしてもやり過ぎなければならぬ夜が彼を待っていたが、たぶん明日こそはバーナードの姪に出くわすだろう……。そうやって彼は一日一日、夜と取り組むのだった。

「……じゃ親父はそこで死んだわけか？ 気の毒に。そいつはいつごろのことだい？」ブロックがしゃべっていた。

「ずっと前よ、父さんは最後まで何も知らなかったの——あたしが行った時だってあたしの顔がわかんなかったものね」

「それからハワード・ウェンダルは？ おまえはあいつといっしょになったんだろ、え？ あのお

巡りをやってた男と？」

「そう、ハワード・ウエンダルよ」とロレッタは言った。

ジュールズは魅せられたようにじっと彼女を見つめた。間違えやしまいかと恐れてでもいるかのようには注意深く、彼女はその名前を発音した。ピンクのドレスを着て気難しく眉をしかめながら、夫であり三人の子の父親であった男を、まるで面通しのために並ばされた容疑者たちの中から冷静に選び出すかのようにだった。「ハワード・ウエンダル。あのね、彼が巡査をやったのは一時^{いつとき}なのよ」

「じゃ殺されたわけか、え？」

「仕事をしてて命を取られたの」ロレッタはのろのろした口調で言った。

「撃ち殺されたんじゃないかってか？」

「その時分はべつのとこに勤めてたわ。工場よ」

ジュールズはそのやりとりに耳を傾けていた。滅入った気分だったが、そのくせ目の前の一組の男女に魅せられてもいた。おぼろげな記憶で結ばれ、思い出話をしながら額を突き合わせて、どこにもあるような台所に、いかにもどこにでもいそうな人間らしくすわっている兄と妹に。まったく人生というやつは不可解だ。ジュールズはその不可解さがどうしてこんなにも卑小な人間の姿となって現われるのだろう、と思った。

「もういかなきゃ」と彼は言った。

「あら、ジュールズ、ゆっくりしといでよ。晩ご飯を食べていかないのかい？ 今夜はみんなにおいしいものを馳走してあげるつもりなんだよ」

「いや、いいんだ」

「自分の伯父さんだっというのに話をしたくないのかい？ 今きたばかりなのにもう逃げ出そう

としていったいなんなのさ？ 何かそんなに大事なこともあるのかい？」

「べつに」

「近ごろは面倒なことに足を突っこんじゃいないんだろうね、おまえ？」

「とんでもないよ」

「ベティに出くわしたりすることあるかい？」

「ないよ」

ベティは今ではほとんど家に寄りつかなかった。家の者たちは彼女のいろんな噂を耳にしており、それ自体はたぶん大げさに誇張した噂だろうけれども、それにしてもめったに彼女の姿を見かけなかった。彼女はウェイン州立大学の下手にある、二番通りに面した建物で仲間たちと暮らしていた。

「ところで」とジュールズが言った。「モーリーンのぐあいはどう？ 声をかけてやったほうがいいかな？」

「あの子は眠ってるけど、のぞいて見たらいい。そうおしよ」

彼は妹の部屋をのぞきこんだが、部屋の中は暗かった。とにかく彼は妹に、というより暗闇に向かつて声をかけるだけはかけて、立ち去った。

その翌日、ジュールズはグロス・ポイントの商店街にあるカーシェヴァル通りから脇道へ曲がったところで、歩道を歩いている例の娘を見かけた。バーナードの姪であることは即座にわかった。連れはいなかった。その日は白いスラックスにピンクのセーター姿だった。彼はたいしてあわてもせず、車を徐行させて彼女の脇を走り、車の中からじっと目を凝らしてそれがほんとにあの少女に間違いないことを確かめた。彼女は一度だけチラッと彼に視線を投げた。彼自身はサングラスをかけていたし、それにそれまで自分でも忘れていたが例の緑色の帽子をかぶっていた。彼は帽子をひたたくてうし